

その昔、坂井先生から「子どもにとっても嫌なスケジュールはあります。だからと言って変えられないスケジュールもある。その時はまずは共感してあげる事が大切。子どもがスケジュールからそのカードを外しても、その時は『やだな～いやだな～』って共感してあげる。後でずっと戻しておけばいいんです。」なんて話を聞いたことがあります。「共感」されると安心しますもんね。共感してあげるって大切な事ですよね。 久田

第 40 回 『わかるように伝えていきますか』

☆経験の場

香川大学 坂井 聡

経験の場は、対人コミュニケーションしている当事者がどのような経験を今まで積んできたのかということと深く関係します。コミュニケーションしている二人の経験が同じであればあるほど、その二者間でのコミュニケーションはより効果的で深いものになると考えられます。

効果的なコミュニケーションをするために、共有する経験をつむことができればよいのですが、実際はそうようにすることは不可能です。まったく同じ経験をして、まったく同じように感じる事ができる人間など存在しないからです。しかし、相手を共感的に理解しようとするならば、コミュニケーションは改善されます。相手の立場を少し考えてコミュニケーションするように試みるということです。

1) 発達障がいのある子どもの場合は

発達障がいのある子どもの場合、感覚過敏などの問題、雰囲気を読み取ることができないことに起因する問題など、学校生活の中で多くの問題に直面していると考えられます。つまり、周囲の人と同じような経験をしているように見えても、実際にはその感じ方が違うために、まったく違う経験をしているかもしれないということです。それは、発達障がいのある子どもの感覚や想像力、社会性等に起因するものなのですが、それが理解されていないために、誤解されたりすることも多くあると考えられます。また、そのことが原因で、トラブルになることも少なくないでしょう。

2) どのようにすればいいのか

まずしなければならないことは、大人の側が共感的な対応をすることです。違った感じ方で経験してきているのではないかと考えてみることです。これまでの周囲の反応から考えると、ネガティブに感じることはできなかったのかもしれませんが、先生や子どもたちからの一言で深く傷ついてきたかもしれないと考えて関わるようにすることです。あなたの感じ方はそうなんだねと認めることからスタートするのです。

共感的な対応をするためには、大人の側が発達障がいのある子どもの感じ方や解釈の仕方について理解していく必要があります。発達障がいのある人たちが書いた書物や、疑似体験などをすることも理解するうえでは有効な方法だと考えられます。また、対象となる子ども本人から、考えていることや、その時の気持ちを聞くことも重要です。どのように感じたのか、どのように伝えられたことを解釈したのかは、その子どもにしかわかりません。その時の感想を、まず、受け取るということが大切です。その子どもの感想や考えを聞くときは、頷きながら聞くことも大切です。その解釈は間違っていると聞きながら感じたとしても、最後まで頷きながら聞くようにするのです。途中で話をさえぎるのはよくありません。自分を受け入れてもらっていると感じる事ができるようにしないといけないからです。理解者であるあなたが、最後まで聞かなくなったら誰が理解することができるのでしょうか。まず気持ちや感じ方を聞くことから始まるのです。

また、話題を共有する工夫をすることも重要です。その子どもの得意な話題を中心にして話をするようにし、その子どもが話題を共有して話すことを経験できるようにするのです。子どもの話題に合わせるようにすることで、コミュニケーションの練習がより効果的になるとともに、お互いの信頼関係も築いていけるということなのです。

新しい年が始まります。新しい年はその子どもがどのように経験しているのかを知るところからスタートしてみてもはどうでしょうか。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里) クラブルームコミュニケーション (こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア (エンバフメント研究所) など